



「伝統染織実地見学」は、昨年度実施して好評だった「加賀友禅工房見学」(11月30～12月1

日)に続く第3回の産地研修を2012年2月25日(土)、26日(日)の日程で小千谷・塩沢・六日町産地で実施します。

また、規約第5条(会員の種別)「名誉会員は、本会の領域において特に功績があり、理事会の決議を経て推薦され、総会で承認された個人」の規定により、前会長の波多野進氏を名誉会長に選出しました。

▼日本きもの学会は平成18年に京都で産声を上げました。それに先立ち、平成14年には、「きもの」に絞ったユニークな「きもの学」講座が産学協同で始まりました。この講座が、初回で早くもコンソーシアム京都の参加者記録を打ち立てる人気講座になりました。さらに、当時ブームとなっていた「ご当地検定」を先取りする形の「きもの文化検定」もスタート。これらの「余勢」を駆って(？)の学会設立となったもので、振り返ってみれば、怒涛のような「きもの文化熱」の高まりでした。

▼きものは日本に固有の伝統衣装にとどまらず、否応なく、日本文化を纏うものでもあります。世界最古の「源氏物語」にも表される雅やかな王朝絵巻は、きもの文化の精華でもあり、また、日本の四季の美しさはきものがあってこそ、の思いは日本人だれにも共通するものです。そのきものも、時代の波に翻弄される歴史上の事象と同じく、時々の変遷に身を任せます。しかし、たゆたえども沈まず。歴史の流れの中で、きものは普遍の美を獲得していきます。きものが伝統衣装であることは、こうした歴史の変遷に思いをいたすことにもあるのかもしれない。

▼学会の役割がますます重要になっていきます。きもの文化を多角的・総合的・学際的に研究して、日本文化の一助に資することが今、求められています。それも、学窓で想を練る類のものではなく、フィールドワークが第一です。論より証。きものに興味・関心を持ってもらってきつかけ作りが当学会の様々な事業やイベントや論考を通じて実現すれば、これに勝るものはありません。…えらく、仰々しい「編集だより」となりましたが、これも5周年を迎えた高揚とご容赦ください。

# きものの素晴らしさ、学術的に裏付ける活動を

日本きもの学会会長代行  
**高橋裕子**

国立大学法人奈良女子大学  
保健管理センター教授



平成23年7月23日に、波多野進前会長の後を引き継ぎ、美しい衣装であり、日本人の心そのものであると考えました。平成18年の設立以来、本学会の発展はめざましく、学会誌「和魂伝心」の発刊、学術誌「きもの学研究」の発刊に加え、年次大会や市民公開講座の開催やきもの文化塾の開催、研修旅行の実施、きもの学講座への協力などの数々の事業を展開してきました。

これも偏に波多野前会長、柿野・植村両副会長をはじめ、理事、事務局、そして会員の皆様が一丸となつての努力の賜物であります。この大きな歩みを止めることなく発展させ、次の代に引き継いでゆく役割の一端を担わせていただくこととなり、重責に身の引き縮まる思いです。皆様方のご指導ご支援をお願い申し上げます。

野・植村両副会長をはじめ、理事、事務局、そして会員の皆様が一丸となつての努力の賜物であります。この大きな歩みを止めることなく発展させ、次の代に引き継いでゆく役割の一端を担わせていただくこととなり、重責に身の引き縮まる思いです。皆様方のご指導ご支援をお願い申し上げます。

## 「きもの文化」の発展へ 23年度「日本きもの学会総会」開催

### きもの塾や染織産地実地見学など実施 高橋裕子氏が会長代行に、役員の一部改選も

平成23年度の総会が7月23日(土)、京都産業会館7階第3研修室で開かれました。総会では平成22年度事業報告と決算報告、並びに23年度の事業計画と収支予算(いずれも案)が承認された他、一部役員改選とそれに関連する規約の改正(案)が提案され、承認されました。総会に引き続き市民公開セミナーとして木津川計氏(「上方芸能」代表)による「粋の美意識はなぜ衰弱したのか」の特別講演がありました。

を指します。

◆平成23年事業計画  
研究事業Ⅱ「染織技術」生活・環境「文化」教育「産業」ビジネス」の6テーマで研究会が設定されていますが、必ずしも期待通りの活動となっていないと見なされました。今年度は、再検討を加えて実質的な活動

か、「村山洋介「思い出クラフト」能登一彦「加賀伝統染織実地研修に

「伝統染織実地見学」は、昨年度実施して好評だった「加賀友禅工房見学」(11月30～12月1

してきもの素晴らしさを学術的に裏付ける活動を、広める役割を担うことは重要です。

このために学会がなすべきことは二つです。一つは、きものに関する研究や発表を活性化することです。幸いにも本学会においては、きものに関する研究推進のための6つの研究部会が立ち上がり、研究発表の場として学術誌「きもの学研究」と年次大会も設けられています。今後はこれらの場がさらに活発に利用され、きものに関する学術的情報発信の場として継続的に活用されるよう進める所存です。

もう一つの学会のなすべきことは教育啓発です。幸いにも本学会においては市民公開講座のほか、富山理事のご尽力で「きもの文化塾」を定期的に開催いただいています。また清田理事のご尽力で今年度も2月に研修旅行を企画いただいています。加えて「きもの学講座」や「きもの文化検定」との連携など、教育啓発の面においても数々の優

れた体制を作り上げていただいています。これらの活動をしつかりと発展させることが非常に重要であると認識しています。

私自身の研究領域に関して申しますと、現在、きもの健康についての研究に携わっています。市田理事のご協力を頂き、きもの着用者の健康調査をさせていただいた結果、「きものは健康に良い」ということが学術的に裏付けをもらっています。

本学会ではこれらの諸活動を通じて、きもの素晴らしさを、今まで以上に強いインパクトをもって発信してゆく所存です。もとよりこれは、皆様方のご支援なくして出来ることではありません。創立以来5年という短期間にここまで発展を作り上げてくれたことに深い敬意を表するとともに、皆様のご協力とご指導を重ねてお願い申し上げます。

## 「粋の衰退」は「きもの文化」衰退に直結 記念講演 洒脱な木津川講師のセミナーに沸く



「日本きもの学会」が発足して今年で5年目。23年度「総会」に引き続き記念のセミナーが開かれました。今回は、

れたこともある、雑誌「上方芸能」代表の木津川計氏。定評の軽妙洒脱な語り口はこの日も冴え、名料理人の包丁の腕を見るような鮮やかさで難解な九鬼周造の名著「いきの構造」を解析。とくに、日本文化の基底をなす、粋(いき)の精神が近年ますます崩壊していきように感じられるのはなぜか。稀代の名著誕生の時代背景にまで遡って「いき」の今日的意味合いを考えさせられた。また、「いき」の成立に欠かせないものとして、「きもの文化」に触れられ、参加者に感銘を与えました。

## 「第10回 きもの学・京都」講座

今回で10回目となる(社)全日本きもの振興会主催の「きもの学」が8月31日(火)～9月18日(土)の日程で開催されます。コース設定は従来の15日間から7日間に絞り込んで実施されます。

## 第6回きもの文化検定

6回目となる「きもの文化検定」((社)全日本きもの振興会主催)が、10月23日(日)に全国各会場で実施されます。今年から1級、2級にそれぞれ準1級、準2級新設されます。申し込みは、9月9日(金)(当日消印有効)までに郵送または文化検定公式サイトから行うことも可能。詳しくは、きもの文化検定公式サイトか、実施要項でご確認ください。

▼編集だより



# 私のきもの振興論 下

徳地 昭治

昨年、発刊された初の学術誌「きもの学研究」に掲載された論文の中から、徳地昭治氏の「きもの振興論」①を前号に引き続き掲載します。

## 〈通過儀礼着〉としてのきもの

きものをフォーマルとカジュアルに、仕分けるのが業界流だが、前号で述べたように、きものにカジュアルは存在しない、と言い切っても間違いは少ない。その上で、きものフォーマルをさらに厳密に仕分けると――。

訪問着や色（黒）留袖などの結婚式や園遊会や茶席などのセレモニーシーンで着用する「純フォーマル」、成人式の振袖や、産着に始まって七五三・十三詣りなどに着用する「通過儀礼着」としてのきもの、同窓会や仲間内の集り、記念日、海外旅行など、ちよつと、頑張つて、着る「マイフォーマル」などに分けられるだろう。その内、大きな市場ウェイトを占めるのが「通過儀礼着」としてのフォーマルきもの。さらにその通過儀礼着の中でも、大き

## 〈フォーマルに依存する業界の実態〉

このことを縮めて言えば、きものマーケットは、20歳ということだ。いうことだ。

## 〈婚礼マーケットの陥没〉

本来、肥沃なはずの通過儀礼着としてのきものマーケットが一貫性を欠いて一本線に結ばれずに、ばらばらの動きに終始しているように見えるのになぜなのだろうか。それには、理由があるように思える。これまできもの通過儀礼着の中心を占めてきた「きもの婚礼マーケット」が大きく、陥没していることがあげられる。これまでは通過儀礼着の、へその部分に、嫁入り道具のきものが座つて、前後にきもの通過儀礼が用意されていた。「前」には、七五三、十三参りとステップアップを重ねて成人式の振袖に至る。そこから嫁入りを見据えた道具揃えの婚礼仕度需要と言う頂上が形作られる

丹後・京友禪に占める振袖のシェア

	丹後 (%)	京友禪 (%)
平成11年	25.9	10.6
平成12年	25.6	12.0
平成13年	25.2	13.3
平成14年	26.5	14.6
平成15年	34.1	17.0
平成16年	36.0	17.7
平成17年	38.5	18.1
平成18年	40.7	19.1
平成19年	37.4	25.4
平成20年	37.6	23.9

と、いう図式だ。「後」には、挙式後のご近所訪問の付け下げきもの、黒羽織、色無地のPT Aきもの、不祝儀の喪服等々へと、きもの通過儀礼着のなだらかな裾

の振袖と7、5、3歳の四つ身（産着・熨斗目などを含む）の2つの通過儀礼着が半分近くを占め、市場や業界を支えている、といえる。俗耳に入りやすく表現すれば「商売の半分を、7才と20才で稼ぐいい業界」と言われかねない。業界内でも、この実態はなかなか認識し難いもの

なのだが、このあまりにも高い2つのきものアイテムへの偏重ぶりは、きものマーケットの現実が業界認識とも、また一般の認識とも隔たっているもう一つの、乖離現象である。

今少し、2アイテム偏重の実態を、振袖の産地の生産統計で見えてみることにしよう。きもの表生地の最大産地、丹後では、近年、振袖向けの生地需要が高まっており、最新ピークの2006年の生産統計から類推すると、振袖向け生地生産が全体に占める割合は40.7%の比率。同

野が広がった。

某きものNC店（ナシヨナルチェーン）では、十三参りから結婚までの10年間をきもの販売のゴールデンエージと呼び、その中心に振袖を据えた販売に全力投球した。この一点突破の販売集中が奏功して全国販売網の敷設を成功させてきたものだった。出店地の成人式対象人口×シェア30%が振袖の販売目標。そこに至る前段階アプローチを四つ身や十三参りマーケットとし、一方、振袖で獲得した成人式マーケットの3年後には肥沃な婚礼需要の山が待っている。その登頂を成功させるためには、装備を身軽にしようとして振袖ローンの回数は36回を限度とする、という販売を徹底してきた。

ところが、いまでは「婚礼仕度」という言葉も聞かれなくなつて、きもの通過儀礼の核となる、ターミナル駅はさびれてきた。「嫁入り道具」の言葉は古語となり、「婚礼衣装路線」はもはやローカル線の一部残すにとどまつて、線路は錆付きつつある。であるなら、これまでの婚礼と違う大幹線道に代わる複数の中規模路線をどのように架け替えていけばいいのか、そして、その復旧作業はいつからどのような形でやるのか。

じく、京友禪では、2005年の振袖生産は全体の25.4%のシェアだが、加工料単価は明らかに他品種を凌駕するので、金額シェアでは、この数字の倍にはなるだろう。

いずれにしても、丹後、京友禪両生産現場での振袖シェアは、先の調査機関がはじき出した20%シェアをはるかに凌駕しているのである。「きものを日常に」とか「きものファッション」などと唱えても、振袖と四つ身の2つの通過儀礼着だけで軽く全体の40%を占めるのが現実。この現実からは、通過儀礼着としてのきものあり方に新しい視点を当てることの方が、きもの振興策の近道かもしれない、という結論を導き出すのは容易だ。そして業界サイドから見ても、今由々しき問題として浮上しているのが、振袖と四つ身に限っていても、足元の市場が新業態に侵食される危機である。

その新業態とは「写真館」や「レンタルショップ」で、映画におけるシネコン、銭湯におけるスパー銭湯に似た形の新強敵出現と言つてもいい。ピーク時と比較して10%以下に落ち込んだきもの需要の自然反騰は、実は、こうした新業態が揃い上げかねないのもう一方の現状とも言える。フォーマルという、

きものど真ん中需要がきもの専業者の手から離れつつある、という指摘がほかならぬ業界内からもあがっている。

フォーマルきもの再構築は明日・明後日の課題ではなく、差し迫つた課題として突きつけられているのである。

であれば、現実のきものマーケットの動きに沿つた、きもの振興の方向性はこう断定して間違いは少ないのではないか。きもの振興のカギはフォーマルの再構築であり、きものという商品アイテムに求められている要素は「フォーマル時々ファッション」――と。

## 〈通過儀礼市場の深掘りを〉

通過儀礼着としてのきものは、思いつくまま時系列的に上げてみても、この世に生を受けた時からの産着にはじまつて、宮参り、七五三、十三参り、と成長の節目を踏み、やがて、入卒きもの（袴）から成人式の振袖までのゴールデンエージを迎える。振袖は、結婚式列席や色直しの振袖にも活躍の場が与えられ、その後には、結婚道具としての喪服、黒留袖、色無地などが控える。結婚してミセスエージに入つては、出産・子育てできものの不毛市場となるが、最近、お受験熱の高まりで見直され

言えることは、婚礼やその前の振袖という大ターミナル駅だけで集客するのではなく、「道の駅」を加えた、拠点のローカル駅を経巡る〈通過儀礼〉の周遊路線の魅力で迫る必要がある。要は、ばらばらに存在するかに見える、今のきものフォーマル路線を編成しなおして、産着から歳重ねの祝いで至るきものフォーマルを一本の線で結び直すことではないだろうか。

## 〈通過儀礼にレンタル化の波〉

ところが、この通過儀礼着市場にも今、深刻な事態が現れだしている。成人式のユニフォームとまでいわれる振袖を例にとれば、成人式振袖はもはや、モノとしての振袖を所有することよりも、20歳の思い出を作るコト需要への、変換、が進行中で、メモリアル創りのツールは、振袖よりアルバムに移行する傾向さえ見られる。であればということ、振袖は、セル（販売）からレンタルで済ましてアルバムづくりをアピールする「写真館」の振袖販売が低価格販売を実現したこととあいまつて、市場シェアを大きく伸ばしているのが実情だ。また、七五三の四つ身は振袖より早くに、このレンタル化と写真館シェアアップの傾向

が始まっている。つまり、通過儀礼着の2つのきもの代表商品は、このままでは、呉服アイテムから遠ざかつていく傾向すら認められる。最近では、成人式、七五三など行事の定着が著しく、そこでのきもの着用シーンが目立つのだが、華やかになったこれらのきものシーンも、内実を知る者にとっては、とても「きもの姿を見かける機会が増えた」と、手放して喜んでいられる状況ではないのだ。さらに危惧されるのは、きものレンタル化の進行が通過儀礼着だけに止まらず、「きものはレンタルで十分」というような着用習慣が広がっては、きものや業界の未来は開けな

い。

## 〈フォーマル時々ファッションを〉

通過儀礼着としてのきもの未来を託すには、レンタルという強敵を避けて通れないのが現状で、これら新ライバルと対抗していくためにも、ここでは改めて、ファッションとしてのきもの価値創造に取り組む課題が浮かび上がってくる。

カジュアルきものという分類は存在しないと前述した。それは、業界内でカジュアルと分類するきものでも、着る側からすれば、それは、こ

ている、PTAのきもの（色無地）は、きもの再登場エージとなる。これもきもの新・通過儀礼着である。加えて、各種のパーティーシーン、趣味やちよつとしたお出かけに着るきものは、暮らしぶりの余裕や日本文化回帰の気持ち表現するものに違くない――と、きものによる通過儀礼がたゆまず続き、さらには、高齢化社会にも対応した、歳重ねの祝いで、（結婚）記念日のきもの：まで続くとなると、通過儀礼着など一言で片付けられない多彩なラインアップが浮かび上がってくる。

こうした、齢を重ねることで遭遇する通過儀礼を縦軸に、それぞれの年代で多彩な装いの美を競う横軸を用意すれば、この分野の市場の肥沃さは計り知れない。少なくとも、振袖と七五三の二つの商品で完結するようなものではなく（この両商品については、別途、写真館やレンタル店からマーケットを奪還する方策が考えられるべき）きもの振興と言えば反射的に、きものファッション化やカジュアルシーンを思い浮かべることもないはずだ。

また、縦軸となる通過儀礼記念日も、バレンタインデー、クリスマス、ハロウィン、母の日や父の日、ボスの日など

持つており、ゆかたにもそのことは当てはまるからだ。それとよく似た事情で、フォーマルきものにも、ビビットなファッション要素を持ち込まないと、フォーマルきものは退化する一方となる。業界は、過去「撫松庵」ブランドに見られるニューきものやゆかたブーム、そしてアンティークきものなど、ファッションとしてのきものに振り向かせた経験があることを思い返してみたい、とだけ指摘しておく。さらに、ファッションの流れとは少し外れるが、大きな社会的関心と呼び起こした「一竹辻が花」を先導役にした辻が花ブームなども思い返せる。要は、手堅いフォーマルマーケットだけをターゲットとすれば、レンタルと言う思いわぬ陥穽が待ち構えている。どうしても、ファッションやブームと呼ばれる社会的な関心の盛り上がりやきものが取り戻すことが重要で、そのことよって、バランスの取れたきもの振興となるのである。従つて、ここでも再び記すと「フォーマル時々ファッション」がきもの振興のテーマとして浮かび上がってくるのである。（以下、略します。詳しくは学術誌「きもの学研究」をご覧ください）